



富山大学附属図書館所蔵

The Lafcadio Hearn Library

ヘルン文庫



Lafcadio Hearn (1850~1904)

小泉八雲

神國
JAPAN

AN ATTEMPT AT INTERPRETATION

BY

LAFCADIO HEARN

Honorary Member of the Japan Society, London;
formerly lecturer in the Imperial University of Tokyo
(1896-1903), and fourteen years a resident of Japan.

"Perhaps all very marvellous
national characteristics can be
traced back to a time of
strife and perverting
adaptation."

-WALTER BAREHOT.

NEW YORK:

THE MACMILLAN COMPANY

1904

Men for at
years. So
the subject
of a
could not
difficult
scholars
in time to
small. Even
themselves,
edge of their
possible;
of obtaining
we not yet
or the mountains

of material have been collected.
The want of any good history
upon a modern plan is but
one of many discouraging wants.
Data for the study of sociology

The manuscript by Lafcadio Hearn 『Japan』

ハーン直筆の原稿「神國日本」

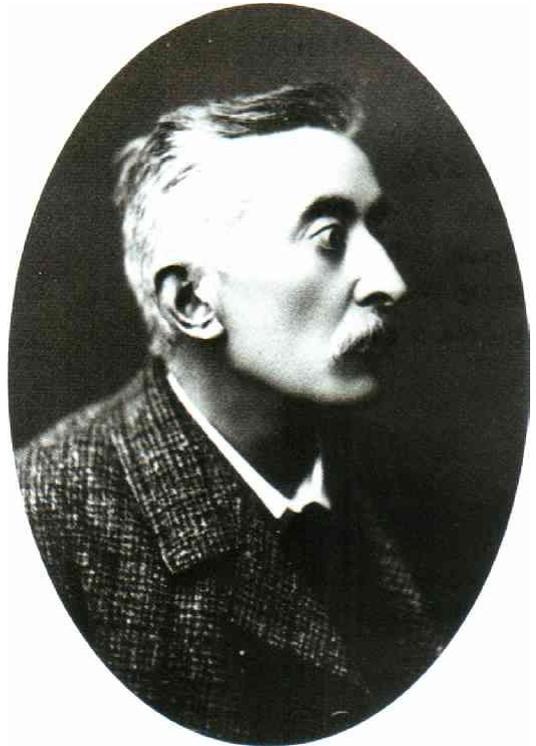
ヘルン文庫の由来

ラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904、日本に帰化して「小泉八雲」と称した)が所蔵していた全蔵書を文庫としたのがヘルン文庫である。なぜこのような文庫が富山大学に存在するのであろうか。

それはハーン亡き後、蔵書は小泉家で保存され研究者に利用されていたが、関東大震災で貴重な文献が多く失われ、小泉家でも危惧を感じてこれらの蔵書をどこか一括して保管できる大学へ譲渡してもよいという意向があった。

ハーンが亡くなってから、「小泉八雲全集」の出版などで小泉セツ夫人の助力をしていたハーン研究家の田部隆次氏(女子学習院教授・ハーンの高弟)から意向を聞いた南日恒太郎氏(本学の人文学部、理学部の前身である旧制富山高等学校の初代校長、田部氏の実兄)は、新設の富山高等学校へ全国から研究者を集めるには最も相応しい蔵書であると、田部氏に譲渡を依頼した。

購入資金については、富山市東岩瀬の素封家「馬場はる」氏(旧制富山高等学校創設のための資金を富山県に寄付された家)に懇請され、同校の開校記念に、馬場家が小泉家から譲り受け、寄贈したものである。



文庫を寄贈された「馬場はる」氏像



馬場家から旧制富山高等学校に贈られた「小泉八雲図書館」

なぜヘルン文庫と呼ぶか

ハーンがアメリカより来日し、英語教師として最初に赴任した島根県松江市では、「ハーン」の発音が「ヘルン」に近かったらしく、学校関係者が「ヘルン先生」と呼び、妻のセツさんも「ヘルンさん」と呼んでいた。

また、ハーン家の紋章「あおさぎ」は英語で【Heron】と発音が類似していること、またヘルン文庫の蔵書中に「へるん」の刻印があることから、本学でも「ヘルン文庫」と呼称している。



小泉家の家紋

ハーンの生涯

ハーンは1850年にギリシャのレフカダ島で生まれた。父は駐留中のイギリス軍医、母はギリシャ人であった。幼少のとき父母は離婚し、父の故郷アイルランドで育ったが、父も病死して7才から大叔母に育てられた。イギリス、フランスの宗教学校で学んだが、遊戯中の怪我で左眼を失明した。ハーンの写真には、右側から撮った写真が多いのはこのためだろうか。大叔母の破産で支えを失い、流浪のすえ知人を頼ってアメリカに渡った。辛苦の末ジャーナリストとして、シンシナティ、ニューオーリンズで著名となった。フランス文学の翻訳、文芸批評、書評などを新聞、雑誌に寄稿し、また自著も出版した。



生誕地（ギリシャ・レフカダ島）



ハーンの記念碑(レフカダ島)

日本へ

ニューオリンズで開催された万国博覧会の東洋関係コーナーに関心を持ち、日本コーナーで服部一三氏と知り合った。

出版社から依頼の紀行文を書くため、1890年にハーン(40才)は挿絵画家を同行して来日した。

しかし原稿料等が挿絵画家より低いことに屈辱を感じ、出版社との契約を破棄してしまった。



「1890年3月日本へ向けて出発」

松江時代



ハーンの旧居(松江市)

ところが生活に困窮し、東京帝大のチェンバレン教授や文部省の服部一三氏の世話で松江中学の英語の教師となった。当時の松江、出雲は日本文化の発祥の地であり、

まだ明治の西洋文化の影響を受けていないところであった。「知られぬ日本の面影」「日本瞥見記」などにも描かれている。

ハーンの身の回りの世話をしたのが「小泉セツ」であった。松江の冬は寒く、再び冬を迎えることを嫌ったハーンは、チェンバレン教授の世話で熊本第五高等学校へ移った。

熊本、神戸時代

このときハーンはセツと結婚し、長男が誕生している。熊本はハーンに合わなかったのか、3年後には神戸へ移り、英字新聞『神戸クロニクル』の記者となった。家族のことを悩んだハーンは日本に帰化し、名を「小泉八雲」と称した。

熊本では、ハーンの日本で初めての著書「知られぬ日本の面影」を出版し、神戸へ移ってからは文筆活動も進み、「東の国から」「心」などを書いている。1896年に東京帝大から「英語英文学」の外人講師に招かれ、一家は東京へ転居した。

東京時代

大学の授業とともに文筆活動も盛んで、「仏の畑の落ち穂」「異国情趣と回顧」「影」「骨董」「怪談」などを出版している。

東京帝大には7年在籍した。その間に次男、三男が誕生した。ハーンはやがてアメリカへ帰ることを望み、長男には幼いころから英語教育をした。その時使われたテキストが文庫にあり、ハーン自筆の書き込みがある。

ニューオリンズの新聞記者時代から親交があり、ハーン伝記作家でもあるエリザベス・ビスランド(ウエットモア夫人)が、コーネル大学でハーンの講演を企画したがハーン健康がすぐれず、取り止めになった。1903年の夏、長女が生まれ、ハーンが抱いていた祖国へ帰る思いは捨てねばならなかった。1904年4月から早稲田大学から英文学の講師として招かれた。



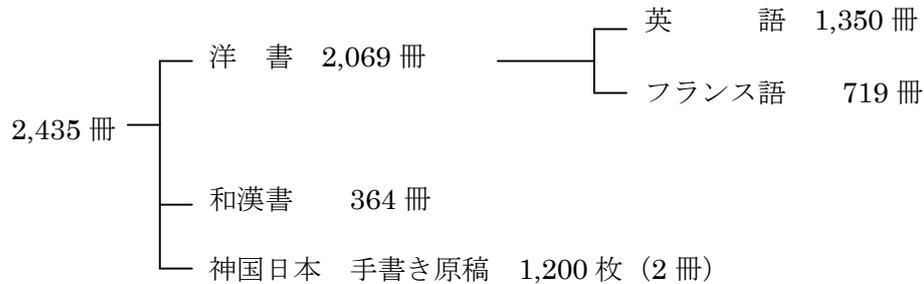
ハーンの家(東京西大久保の自宅にて)

「神国日本」の原稿の仕上げと出版ゲラ読みを行っていたが、残念なことに、この出版をみることなく、9月26日に心臓発作で亡くなった。享年54歳であった。9月30日に仏式で葬儀が行われ、墓は雑司ヶ谷の墓地に建てられた。法名は「正覚院浄華八雲居士」、折しも日露戦争の最中であった。

11年後の大正4年、ハーンに従四位が送られた。文人としてのハーンの功労が日本政府によってこの時初めて、正式に認められたのであった。

文庫の内容

文庫は洋書2,069冊、和漢書364冊および「神国日本」の手書き原稿1,200枚、合せて2,435冊からなっている。洋書のうち、1,350冊が英語、719冊がフランス語の図書である。



蔵書には印が押してあるが、英字のものと日本字のものと二通りある。1927年に文庫を整理して作られた「Catalogue of the Lafcadio Hearn Library」では、英字の蔵書印が押してある図書のタイトルには「*」印をつけて区別してある。

この「*」印がついているものは、ハーンがニューオリンズ時代、忙しいにもかかわらず毎日2時間かけて古本あさりをしたという情熱による収穫とみられる図書である。

「へるん」という平がなの蔵書印を押してあるものは、前記英文カタログでは「無印」になっていて、これらは来日後に入手した図書と思われる。

ニューオリンズ時代に入手したものは、英語の図書195冊、フランス語の図書358冊である。つまり英語の図書は7分の1、フランス語の図書は2分の1がアメリカ時代に購入したものである。



神国日本『Japan』の直筆原稿とその刊本

蔵書の内容については、前記の目録が用意されているので、興味のある方は手にとってみてほしい。ハーンに日本について興味を抱かせた図書として、Arnold, Sir Edwin-The light of Asia. Chambalain, B. H. A Translation of "Ko-ji-ki" (古事記)とThings Japanese. Lowell, Percival-The soul of the Far East. が収められている。

また、和漢書類はセツ夫人の説明を通してハーンの文学的作品の資料となったもので、帝国文庫38冊、百物語類が7種、耳なし芳一の原本ともなった「臥遊奇談」5冊や仏教関係書など、大半は木版刷の和装本である。

その外、ハーンがその子息に英語を教えるために使ったと思われるポールドウィン読本8冊のうち4冊や、マクミラン社新文学読本10冊のうち5冊などには、ハーン自筆のカタカナの書き入れがあって、ハーンを偲ぶ縁として感慨深いものがある。



むすび

ハーンが書いた「耳なし芳一」や「雪女」などの怪談はあまりにも有名で、ミステリー作家と誤解されがちだが、怪談の作品は一部で、本当は文学者、文芸評論家そして民俗学者として随筆、紀行文、文芸批評、民族学、翻訳(主としてフランス文学の英訳)などの著書が多数ある。

また、東京帝大では「英語・英文学」の講義を担当し、英文学史、詩論などの著書もある。

かつて、外国、特にアメリカでは日本を研究する上で、ハーンは欠かせない人であり「神国日本」がマクミラン社から出版されると、海軍士官学校では必読書とされた。太平洋戦争中は、ベネチクトの「菊と刀」となると、日本を理解する上で必須文献とされていた。昭和55年に、アメリカのマンズフィールド大使夫妻が日本に赴任されて、真先にヘルン文庫を訪れたのも、ハーンによって日本を理解されていたからであろう。

ハーンは明治期の日本を欧米に紹介し、その内容は古い時代の日本であるかもしれないが、日本民族、日本人の精神は現在も将来もそう変わらないと思われる。外国で日本を知るためにハーンの研究が行われており、日本人が日本を研究するにもハーンは欠かせない。

ヘルン文庫の意義は、こういうところにもあるのではないだろうか。

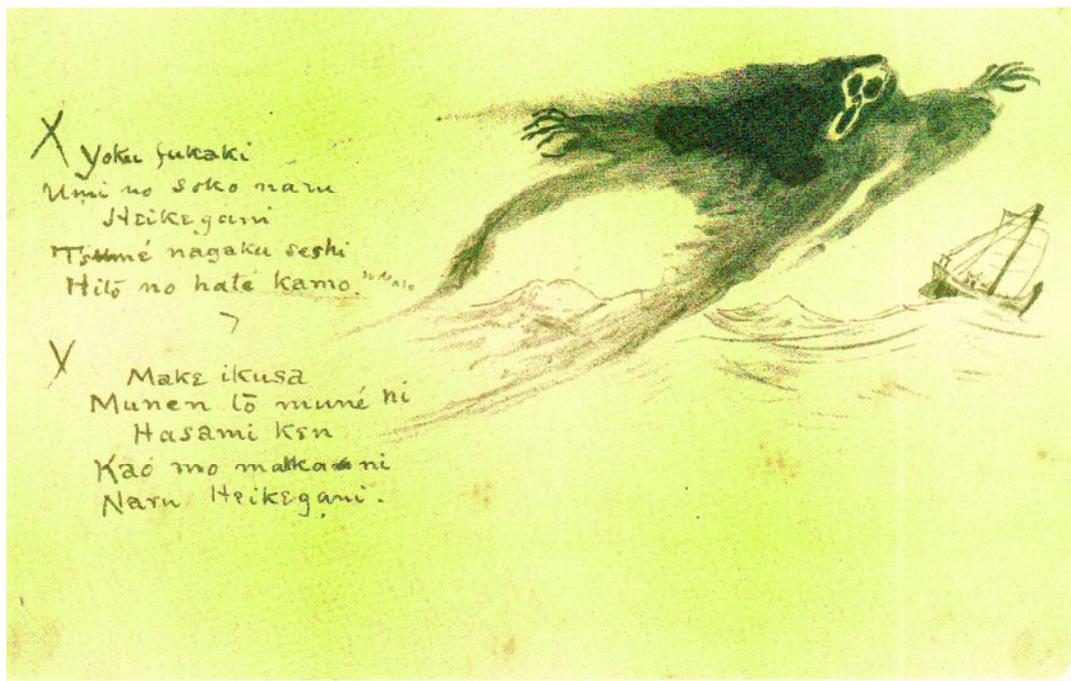
小泉八雲年表

西暦	年号	ハーン 年齢	事 項
1850	嘉永3		6月27日ギリシャのレフカダに生まれた。当時父32才、母27才。父はその後、西インドへ赴任。
1851	〃 5	2	8月母とともにアイルランドに到着。
1853	〃 6	3	父は病気のためグレナダから帰り、ハーンと初めて対面。
1854	安政1	4	父クリミヤに向う。弟ジェームズ生まれる。母はギリシャへ帰る。
1856	〃 3	6	7月父クリミヤから帰る。父母離婚、大叔母サラ・ブレナン(Brenane)夫人に養われる。
1857	〃 4	7	父は再婚して8月インドへ赴任。
1861	文久2	12	この頃ハーンはフランスのイブトー(Yvetot)教会学校に在学。
1862	〃 3	13	ブレナン夫人イギリスへ移住。9月イギリス東部ダーラム郊外のセント・カスパートカレッジに入学
1863	慶応2	16	学校で遊戯中に事故のため左眼失明。11月父は帰国の途中スエズで死亡。
1866	〃 3	17	大叔母ブレナン夫人破産のため10月、カレッジを退学。
1868	明治元	18	ロンドンで放浪生活。
1869	〃 2	19	単身で新天地アメリカへ渡り、ニューヨーク着。
1874	〃 7	24	シンシナティ・インクワイアラー(Cincinnati Enquirer)新聞の記者となる。 6月21日、日曜新聞イー・ジグランパス(Ye Giglampz)を発行して9号まで続ける。
1875	〃 8	25	マッテ(Mattie)という混血女性との短い結婚生活。
1876	〃 9	26	シンシナティ・コマーシャル社(Cincinnati Commercial)へ移る。
1877	〃 10	27	10月シンシナティを去って、11月12日ニューオーリンズ (New Orleans)に到着。
1878	〃 11	28	6月15日ニューオーリンズ・シティ・アイテム(New Orleans City Item)社の記者となり、後副主筆となる。
1879	〃 12	29	3月小さな料理店開業。すぐ廃業。
1881	〃 14	31	12月4日タイムズ・デモクラット(Times-Democrat)社に変わり、その文学部長となる。
1882	〃 15	32	1月翻訳「クレオパトラの一夜、その他」『One of Cleopatra's nights and other fantastic romances』出版。12月15日ハーン之母ローザはギリシャで死去、59才。
1884	〃 17	34	「異文学遺聞」『Stray leaves from strange literature』を出版。
1885	〃 18	35	「ゴンボー・ゼベス」『Gombo Zhebes』、「クレオール料理法」『La cuisine Creole』、「ニューオーリンズ案内記」『The historical sketch-book and Guide to New Orleans』出版。
1887	〃 20	37	「シナ怪談」『Some Chinese ghosts』出版。6月ニューオーリンズを去り10月西インドのマルチニーク(Martinique)島に行く。
1889	〃 22	39	5月ニューヨークに帰る。「チータ」『Chita』出版。
1890	〃 23	40	「ユーマ」『Youma』、「フランス領西インドの二年間」『Two years in the French West Indies』、翻訳「シルベスト・ボナールの罪」『The crime of Sylvestre Bonnard』出版。 3月5日ニューヨーク出発。3月17日バンクーバー(Vancouver)出発。4月

西暦	年号	ハーン 年齢	事 項
1890	明治23	40	4月4日横浜着。8月30日松江中学校へ着任。12月2日小泉セツと結婚。（田部隆次著「小泉八雲」昭26年改訂再版による。）
1891	" 24	41	11月5日松江出発、熊本第五高等学校へ転任。
1893	" 26	43	長男一雄生まれる。
1894	" 27	44	「知られぬ日本の面影」『Glimpses of unfamiliar Japan』出版。11月熊本五高を辞し、神戸の「ジャパン・クロニクル」(The Japan Chronicle)記者となる。
1895	" 28	45	「東の国より」『Out of the East』出版。日本に帰化して小泉八雲と名乗る。
1896	" 29	46	「心」『Kokoro』出版。8月20日神戸を発って上京、東京帝大文学部講師となる。
1897	" 30	47	「仏土の落穂」『Gleanings from Buddha-fields』出版。二男巖生れる。
1898	" 31	49	「異国情趣と回顧」『Exotics and retrospectives』出版。
1899	" 32	49	「霊の日本」『In ghostly Japan』出版。三男清生まれる。
1900	" 33	50	「影」『Shadowings』出版。
1901	" 34	51	「日本雑録」『A Japanese miscellany』出版。
1902	" 35	52	「日本おとぎ話」『Japanese fairy tales』、「骨董」『Kotto』出版。
1903	" 36	53	3月東京帝大講師を辞める。長女寿々子生れる。
1904	" 37	54	4月から早稲田大学文学部講師となる。 9月26日心臓病で死去。 「怪談」『Kwaidan』、「神国日本」『Japan: an attempt at interpretation』出版。



ちりめん本として出版された日本おとぎ話集
「化け蜘蛛」「猫を描いた少年」「だんごをなくしたおばあさん」「ちんちん小袴」「若がえりの泉」の5冊



ハーンの手書きイラスト(船幽霊)『妖魔詩話』1934より



ヘルン文庫を訪れたマンズフィールド駐日米国大使夫妻(昭和55 1980年)



富山大学附属図書館所蔵
ヘルン文庫（改定版）

2007年4月
編集・発行
富山大学附属図書館